
暇つぶしに死んでみる。

マラカス日和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暇つぶしに死んでみる。

【Nコード】

N9806P

【作者名】

マラカス日和

【あらすじ】

平凡で平坦な男と変人で変態な女の怪奇的邂逅。

エピソード

僕は彼女の言葉の意味を知らない。
僕は彼女の行動の意味を知らない。
僕は彼女の本当の名前を知らない。
僕は彼女の本当の顔を知らない。
僕は彼女の何も知らない。

彼女は僕の何を知っている？
彼女は僕の全てを知っている。

なのに、僕は知らない。

どうして死ぬ？死なない？
死なないのか。幽霊は？
いや、死ぬ？幽霊も？なんだそれなんだそれ。
僕は。

僕、にとって…そこは。

踏み入れてはいけない世界だったのか。

今となつては、知る余地もない。

違和感のクロネコ（前書き）

心霊とサスペンスを混ぜこぜにした様な話です。（始まって当分は心霊話になると思いますが。）

純粋なサスペンス、純粋な心霊ホラーではありませんのでそれをご期待されていた方はご了承下さい。推理要素はほぼ無いと思います。それから、出来る限りに頑張りますが更新は遅くなるかと。

前置きが長くなりましたが、どうかごゆるりと宜しくお願い致します。

違和感のクロネコ

《こちら…こ…ら世田谷区3番…通…！！
被害者を発見！！被害…を発…！！
直ち…辺りに包囲網…手配…てくださ…
赤…トは…だ近く…に…》

「こんな話をしよう。」

腰辺りまである、少し黒みのかかった長い茶髪を掻き回しながら、
彼女はニタツと笑った。

「灯も無い様な山奥でね。夜中に車を走らせていたとある男が、黒
猫を轢いてしまった。」

僕は無言で頷く。

「ああ、可哀想な事をしてしまった。
男はそう思ったんだけど、彼には急ぎの用があつてね。
そのまま立ち去ってしまったんだ。」

僕は再び無言で頷く。

「それから30分程度、ずっと山奥の道を走らせていた男は、ある事に気付くんだね。」

彼女はそこで一旦間を置き、呟くような声で話を続ける。

「ついてきてるんだ。黒猫が。凄い速さでね。」

男は小さく悲鳴をあげて、アクセルを踏む。

40:50:60kmとどんどんスピードはあがっていくのに、バックミラー越しに見えるその黒猫はずっと車の速さについてくる。」

僕はそこで、この話のオチが分かった。

有名な話だ。

僕が肩の力を抜くのは反対的に、彼女はより一層語りに力を入れる。

「すいませんでしたすいませんでした……!!」

男は小さい声で何度もそう呟いたけれど、

車と黒猫の距離はだんだんと迫っていくばかり。

もうダメだっ!!って、そう思った瞬間ね。

男はハッキリと見てしまったんだ。車の右隣を走り抜けたその黒猫の正体を。…それは……」

「クロネコヤマトの宅急便でしょう。」

彼女の言葉を僕が遮る。

「クロネコヤマトのトラックに描かれた黒猫の絵を、自分が轢いた黒猫と見間違えた。って話ですよね。」

さも自慢気に話のオチを解説する僕をじっと見ていた彼女は、

「何だ。知ってたのか。」

と溜め息を吐く。

「当たり前ですよ。そんなベタな話。」

僕は吐き捨てる様に言った後、仮にもオカルトサークルなんですから。

と、小声で呟いた。

大学一回生の夏頃だったか。

当時の僕は講義にも出ずに、四畳半のサークルボックス（クーラー完備）で時間を潰すというダメ学生っぷりをエンジョイしていた。

オカルトサークルと言ってもメンバーは僕と彼女の2人だけで、特にちゃんとした活動がある訳でも無い。

時々こうやって怪談話を聞かされたり、心霊スポットに強制連行させられたりと、その位だ。

まあこの時点の僕は幽霊やその他の存在は全く信じていなかったのだが、その手の話が好きな僕にとってはこの空間はとても居心地の良い場所だった。

「ところでさ。」

暮亡さんが手を叩いて僕に呼びかける。

「さっきの話で、腑に落ち無い部分がある。」

「腑に落ちない？」僕が首を傾げると、彼女はまたニタリと口の端を吊り上げる。

「男は、山奥を走っていたんだ。夜中に。山奥をね。」

僕は眉間にシワを作りながらも、三度無言で頷く。

「どうしてだろう。」

「何がですか？」

「…男が黒猫の姿を確認したのは、“バックミラー”だ。」

ドクン、と心臓が揺れた。

そうだ。本当だ。

「クロネコヤマトの宅急便のトラックは、何処に黒猫が描かれているかな？」

「……側面です…。…バックミラーじゃ、黒猫の絵なんて見えるハズが無い…。」

冷や汗が頬を伝う。

「さて、それじゃあさ。

“夜中に、灯も無い山奥に車を走らせていたいた”男は、一体どうして後ろから走ってくる黒猫の姿を認識できたんだろうね？
夜闇に紛れてしまっだろう黒猫を…どうして。」

答えを返せない僕に、彼女はこう言った。

「どんなに些細で、日常的に起こりうる出来事でも、ふとそこに違和感を感じることがある。」

私は、そんな違和感を探し続けるんだ。」

と。

この言葉の真意は、今の僕には分からない。

彼女があんな事になってしまった今となっては、知る余地も無いのかも知れないが。

凡人と変人の遭遇（前書き）

正直、この話は飛ばして頂いても物語に何ら影響を与えない気がする
…うわ、何をするやめ（ry

凡人と変人の遭遇

僕がオカルトサークルへと足を踏み入れたのは、とてつもなく普通で平凡な理由である。

それは、目に付く何もかもが自身を黄金の未来へ導く光に見えると
いう極めて典型的な一年生症候群に陥っていた、入学して間もない
春の事だった。その時の僕はまだやる気と希望に満ちていたのだろ
う。

そんな中で彼女と出会ったのは……いや、出会ってしまったのは、高
校の時の悪友と自分の学科について話をしながら食堂で学食を食っ
ていた時で、それは同時に大学に入ってから1週間余りが過ぎてよ
うやく慣れが見え始めた頃でもあった。

僕が座った席の2つ程隣から、食欲をそそるカレーの匂いと共に聞
こえるさだまさしの声。

思わずその方向へ首が向き、とある人物が視界の中央に定まる。
そこに座っていたのが他でも無い彼女、暮亡さんであった。

ウォークマンから伸びているイヤホンでさだまさしの歌（涙のビー
フストロガノフ或いはご来訪）を聞きながらカレーを食すという一
見すると変わったセンスの持ち主である彼女が後に僕の純金で出来
ていた筈の未来を粉々にぶち壊す事など知る筈も無く、その時の僕
は彼女をただ単に美人だなとかそんな風に見ていたのだった。

僕がオカルトサークルに所属する事になったのも、とても普遍的で
面白味など一切皆無な理由である。それは様々な勧誘のポスターを
見ながらどのサークルに入ろうかと夢や未来やその他諸々の希望に

満ち足りた大学生活にうつつを抜かしていた時の話だ。

他の華やかな勧誘ポスターとは明らかに一線を画した紙切れが僕の目に留まった。

現代にはパーソナルコンピュータ、略してパソコン。更に略してPCという便利な電子機器が在るにも関わらず、そのポスターは無地の白紙に黒い鉛筆で「オカルトサークルメンバー募集中」と書き殴っているだけという非常にシンプルでやる気を感じられないデザインをしていた。

しかし明らかに文章よりも余白の部分が全体を占めている大胆かつ資源の無駄遣いといっても過言では無いそのポスターに、興味を示している僕がいたのも紛う事なき事実である。

一体何時何処に行けばその正体不明のサークルに参加する事が出来るのか微塵も解らなかった僕は友人から教師にまで満遍なく聞き込みを繰り返し、ようやくそのサークルに辿り着いたのはポスターを発見してから3日が過ぎた頃だった。

そのサークルボックスは大学の東校舎3階一番奥の旧事務室という、普段は全く使用されない為に生徒どころか教師からも忘れられた所に存在していて、第一講義室、第二講義室まで徒歩5分というちょっとしたダイエツト効果を期待出来るのではという程行き来が面倒臭い場所に在った。

このサークルボックスへ辿り着くまでに3日もの時間を要したのはそんな裏事情があったからである。

こんな変わった場所にこんな変わったサークルを作る人間はさぞかし大層な変人なんだろうと要らぬ想像を沸き立てながら、僕はその部屋のドアを二度ノックする。

…返事は無い。

もう講義は終わっている時間だし、家に帰ってしまったのだろうか
と思い、ドアを叩く握り拳を開く。

しかし一度試しにドアノブを回して見ると、鍵はかかっていない様
で拍子抜けする程あっさりとその扉は開いた。

「どちらさんですかー？」

扉を完全に開いた時、そんな言葉が僕の耳に届いた。

部屋をキョロキョロと見回して、その言葉の主が床に寝そべってい
る人間である事に気付く。

まあ言うまでもなく、それが暮亡さんだった。

その耳にはいつぞやか食堂で見たイヤホンが差し込まれている。

恐らくこのイヤホンの所為でノックの音が聞こえなかったのだろう。

「あ、オカルトサークルって、此处で…あつてますよね？」

この奇妙なサークルの主があ的女性だった事に少し驚いた僕がキョ
ドリながらそう尋ねると、彼女はそれに対して首を縦に振り、眉を
しかめる。

「げ、もしかして参加希望者？」

「え…まずかったですか？」

「いや、そんなこっちゃ無いけど…変わった人も居るもんだなー。」

むくりと上体を起こした彼女は、僕の手から参加届を受け取り、

「よーこそオカルトサークルへ。」

と、さも面倒臭そうに呟いた。

これが、超平凡的大学生であつた僕、下坂^{しもさか} 嶺^{れい}と変人を通り越して
変態と言つべき彼女、暮亡^{くれなき} 憂^{ゆう}との未知なる遭遇である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9806p/>

暇つぶしに死んでみる。

2011年1月8日21時00分発行